

第201回 「元気に百歳」クラブ「道草」(第10回通信句会)開催

テレビ娯楽番組のゲストに、オリンピックで活躍したアスリートが、出演するようになりました。アフターオリンピック、パラリンピックの始まりです。新型コロナウイルスに対応する人間の考え方も、三回目のワクチン接種の実施や、アフターワクチン接種の検討が始まって来ました。新しい社会観の始まりかも知れませんね。

さて、私たち「道草」句会も、第201回目の「ネクスト ステージ」を、スタートさせました。「通信句会」は、今回で10回目になります。「兼題の提示」は、引き続き原晶如さん、投句と選句の纏めは、今回は本間傘吉さんが担当され、そして全てのアレンジメントは、奥田和感さんが担当して下さいました。お三方には心から感謝を申し上げます。今回の句会に参加して下さいしたのは、次の17名の方々です。

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬菘女さん、辻柴楽さん、手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然(17名)。

今月の兼題は、兼題1「秋思」、兼題2「唐辛子」、当季雑詠の自由題「秋」の3句を詠むことです。そしてその句から、皆さんの心の琴線に触れ、選ばれた私たちの秋の優秀句は次の通りです。どうぞご覧下さい。

兼題1. 「秋思」

◎『繙きし古書より洩るる秋思かな』	白然	天2☆7
◎『夕暮れの浜に秋思の歩を残し』	晶如	天2
◎『丸き背に秋思の夕陽やわらかに』	栄女	天1☆7
◎『オカリナの音に漂ふ秋思かな』	明峰	天1
◎『山の端に夜の垂れ絹秋寂し』	蒼樹	天1
◎『秋さびし会ひたき人に会へぬ今』	多佳	天1

兼題2. 「唐辛子」

◎『唐辛子枝ごと買ひて活けにけり』	歌多音	天1
◎『吊るされて入り日に燃ゆる唐辛子』	傘吉	☆11

当季雑詠の自由題 (=秋=)

◎『カレンダー一枚めぐりそこは秋』	和感	天3
◎『砂城を一気に潰し秋の波』	栄女	天1☆7
◎『潮の香も連れて金柑届きけり』	歌多音	天1
◎『翳雲目で挨拶の発車ベル』	多佳	天1
◎『とんと本揃えて括り秋麗』	晶如	天1
◎『天命を尽くし果てたる秋の蟬』	白然	天1
◎『切通し老いの背を押す風爽か』	傘吉	☆7

兼題1. では、晶如さんの句「夕暮れの浜に秋思の歩を残し」が、天賞二つを獲得しました。秋の夕暮れには、何処となく遣る瀬無い孤独感が漂うものです。中七、下五の句またがり「秋思の歩を残し」とは、絶妙の表現でした。次に白然の句「繙きし古書より洩るる秋思かな」が、天賞二つと、最多得票賞(☆印)をいただきました。中七の「古書より洩るる」が、下五の「秋思」にヒットしたのでしょうか。次に栄女さんの句「丸き背に秋

思の夕陽やわからかに」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）に輝きました。上五の「丸き背」と下五の「やわからかに」が、印象に残ります。これぞ「秋思の夕陽」と言います。句の裏に醸し出される秋の孤独感、寂しさが、読者の琴線をかき鳴らすのでしょうか。

次に明峰さんの句「オカリナの音に漂ふ秋思かな」が、天賞一つを獲得しました。作者が上五で採り上げた「オカリナの音」が漂うとは、秋思にピッタリの音(ね)響きではないでしょうか。作者に「もう、秋ですねえ」と声をかけたら、「そうですねえ」とにっこり笑って返事が返ってきたシーンが浮かんで来ました。さらに蒼樹さんの句「山の端に夜の垂れ絹秋寂し」も、天賞一つを獲得しました。「垂れ絹」とは「張(とばり)」に同じ、部屋の仕切りに下げる布巾のこと。暮れなずむ山の端に、夜の帳が降りてきた情景が閃いたのでしょう。まさに、結びの「秋寂し」です。もう一句、多佳さんの句「秋さびし会ひたき人に会へぬ今」も、天賞一つを獲得しました。必要不可欠の外出以外は、抑制を要求されている今、会いたい人にはなかなか会えません。作者の気持が伝わります。

兼題2. では、歌多音さんの句「唐辛子枝ごと買ひて活けにけり」が、天賞一つを獲得しました。唐辛子の燃えるような「赤」に魅せられ、枝ごと買って活けたとは……。ここがとても印象的で、読者の琴線に触れたのでしょうか。天賞には輝きませんが、傘吉さんの句「吊るされて入り日に燃ゆる唐辛子」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。まるで写真を撮るように捉えた一句です。表現はしていませんが、唐辛子の「赤」色が、極めて印象的です。

当季雑詠の自由題では、和感さんの句「カレンダー一枚めぐりそこは秋」が、天賞三つを獲得しました。九月ともなれば、カレンダーの頁数が、少なくなってくるのが気になるものです。この句は、下五に開いた「そこは秋」が、読者の共感を一挙に獲得したのだと思います。入賞句ではありませんが、錦流さんの句「もう九月残り二枚のカレンダー」という、カレンダーを採り上げた句がありました。これも作者の気持ちが伝わってくる句ですね。次に栄女さんの句「砂城を一気に潰し秋の波」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。下五には「秋の波」と、砂城を潰されてしまう無常さが、読者には伝わりますが、これも秋の寂しさでしょうか。読者の共感を得ての最多得票賞（☆印）獲得でしょう。

次に歌多音さんの句「潮の香も連れて金柑届きけり」が、天賞一つを獲得しました。海に近い丘陵で育てられた金柑が、今年も贈りものとして届きました。金柑と一緒に若布か昆布か、海産物も入っていたのでしょうか。贈り主の温かい気持も一緒に届きました。まさに「潮の香」です。心温まる句ですね。次に多佳さんの句「罽雲目で挨拶の発車ベル」も、天賞一つを獲得しました。遠い秋の一日の思い出でしょうか。作者には懐かしい思い出の一コマかも知れません。印象深い句です。更に一句、原晶如さんの句「とんと本揃えて括り秋麗」も、天賞一つを獲得しました。今年も一年の四分の三を経過、頭の中では読んだ本の片づけが、段々と気になってきます。ある日の秋の麗かさが、ぼちぼち本の片づけを始めようかという暮らしの一端が、顔を覗かせます。まさに「秋麗」の一日です。白然の句「天命を尽くし果てたる秋の蟬」も、天賞一つをいただきました。今秋はいつもより「蟬の生命」を、気になりました。腹を見せて地に落ちた蟬の往生です。天賞ではありませんでしたが、傘吉さんの句「切通し老いの背を押す風爽か」が、最多得票賞（☆印）に輝きました。鎌倉は「秋の切通し」です。きっと爽やかな風が吹き、老いの背をぐんと押ししてくれました。作者は下五で「風爽(さや)か」と、キチンと表現しました。

200回記念「道草」句集作成の準備が始まりました。今夏はもう一つのひょうご「道草」の第十句集発刊の作業を含め、コロナ禍中での作業が、厳しく感じました。この一か月が作業の大事な時期になると思われます。皆さんどうぞよろしくお願い致します。

(白然記)